

8 就労移行支援者（理教生）の食堂利用率と肥満度の実態調査について

総務課栄養管理室 繁田 文子、白井大助、内山久子

障害者健康増進・スポーツ科学支援センター 緒方徹、印南佳代子、矢田部あつ子

はじめに：当施設の就労移行支援者（理教生）の食生活管理は、体調管理の重要な部分をしめており、また訓練効果にも影響を及ぼしうるものである。今回は、体調管理に必要な体重変化と食堂利用率について検討した。

方法：養成施設において年2回実施している定期健康診断の体重変化と自立支援局提供の食堂利用率との関連について統計解析を試みた。調査期間は、平成24年4月～9月のものを用いた。

対象者は、養成施設の利用者（専門課程・高等課程・再理療教育）を対象として、健康診断データを使用した。対象者は90名（男性69名・女性21名）、平均年齢は41.2歳（男性42.6歳・女性37歳）であった。4月・9月の健康診断を受診した利用者の結果を、食堂の利用率の高いA群（入寮生）と低いB群（通所生と利用者で宿舎内自炊をしている利用者）の二群に分けて比較した。

結果：4月の健康診断における肥満者（BMI \geq 25）の割合は男性31.9%、女性28.6%であった。4月から9月の5ヶ月間で、男女ともにBMIが減少していた（男性24.1→23.3、女性23.1→22.3）。その結果、9月時点での肥満者の割合は男性27.5%、女性28.6%だった。

食堂の利用率別に分けた解析ではA群とB群ともにBMIが減少していた（A群23.6→22.8、B群24.4→23.9）が、その減少幅はA群の方が大きかった。また、朝食の喫食率と体重変化には負の相関がみられた。

考察：平成23年度の国民健康栄養調査の身体状況に関する結果での肥満者（BMI \geq 25）の割合（男性30.3%・女性21.5%）に対し当施設利用者の割合は高く、視覚障害者における肥満の問題を示していた。しかし、入所後のBMIは減少傾向を示しており、施設を利用することでよい方向への改善がみられた。したがって、4月から9月の期間での体調管理は向上していると考えられる。

また朝食の喫食回数が多い人ほど体重の減少がおきていた。朝食の重要性は国民健康栄養調査でも指摘されており、それを裏付ける結果となった。

今回の調査で見られた肥満度（BMI）の減少の背景には、各利用者が養成施設の規則的な生活や寮生活を通じて健康意識の向上によるものと考えられる。また毎月開催される健康教育・健康教室への参加も健康意識の向上に繋がっていると思われる。

今後の課題として長期的なデータの収集と解析が必要と思われる。